

Mountain climbing to Hakusan with graduate students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17185

大学院学生を引き連れての白山登山

Mountain climbing to Hakusan with graduate students

金沢大学大学院医学系研究科運動生体管理学

藤 原 勝 夫

今年の夏7月に、10年来の悲願だった白山に登山することができた。白山は標高2702m (御前峰)、霊峰として名高い、広大なブナ原生林が広がり、山頂近くには、室堂平、弥陀ヶ原などの緩やかな斜面がいくつかあり、万年雪に触れることができると聞く。白山市内からは、とてつもなく大きな塊がどっかりと座っているように見える。今回は、友人である宮口先生の奥さんの案内による、大学院生7名を含む総勢14名での登山となった。今年も、いつものごとく研究が忙しく(7月は、国際誌に2編の論文を投稿)、登山の遂行が危ぶまれたが、万難を排して挙行に踏み切った。前日の夜に、登山靴などの買い物を済ませるといった忙しさであった。登山は体力不足も祟り厳しいものであったが、その過程で、研究者としてのこれまでの歩みを思い出すことができるとともに、大学院生を同行したこともあって、彼らの博士論文の作成過程に思いをめぐらすことができた。

なぜこれほどまでに研究が忙しかつという、医学研究科で要求される研究のレベルの高さにある。同研究科では英文で論文を執筆することが要求される。12年前に医学部に移って以来、英文作成のための英文文例集(ノート400ページ)の作成に始まり、国際学会への毎年の参加、外国人研究者との共同研究などを自分に課してきた。おかげで年に5編ぐらいの英語論文を執筆できるようになった。

豊かな研究生生活を送るためには、苦楽を共にする良き仲間(共同研究者)の必要性を痛感してきた。私は、23年前に金沢に筑波大学から赴任してきた。それ以来のすばらしい研究仲間(47歳から66歳、私は55歳で中ほどの年)が4人いる。今回は、その一人(最も高齢の名誉教授)の奥さんに案内役を買っていただいた。白山登山をなんども経験しているベテランである。その友人は、奥さんと相談して登山計画書を作ってくださった。それには、持ち物、注意事項、行程紹介、参加者、グループ責任者、見所など詳細に記されていた。研究計画書に類似している。今回のように、家族ともども交流し、生活を楽しみ、何とか長い研究生生活を続けてきた。

登山当日は、朝5時45分に家を出た。あいにくの大雨であった。この日は、別当合出から室堂(山小屋)まで、距離にして6km、時間にして6時間の行程であった。別当合出では、登山開始の決断が難しかった。天気情報をラジオや携帯電話で収集し、雨脚をみて登り始めた。宮口夫人は、安全を気遣い出発を断念しかけていたが、山国育ちの私は、明日晴れるとの情報と、雨脚が遠のいたのを見て、午前11時に登山を開始した。次の日は、情報通り昼ごろ快晴となった。論文作成と同じように情報収集と経験の大切さを思い知った。

室堂までの6kmに及ぶ登りは初めてであり、きわめて厳しかった。運動が得意でない外国人研究者の沈さんが、室堂に到達した時に「やった」という歓喜をあげたのは、その過酷さを物語っている。と同時に、彼女の全身に大きな自信がみなぎっているのを感じた。今回、初登山の我々に幸いしたことがある。それは、霧で周りが見えず、厳しい行程を確認することなく登

れたということである。快晴となった復路では、このルートの急峻さを目の当たりにした。論文作成の過程においても、質の高い論文を書くことがあたりまえになっていると、その作成の苦しさを感じないものである。

白山登山道には、石段が敷き詰められている感があり、登りやすかった。登山のルールもしっかりしており、すれちがう時に登る人が優先される。挨拶や励ましの言葉が、苦勞を共有しているとの感を強め、心にしみいった。苦しくなるにつれて、こまめに到達目標地点を定め、徐々に休憩までの間隔を短くしていった。研究生生活で得た知恵である。

宿泊所室堂には夕刻5時ごろ到着した。ここでは、8時30分に部屋の電気が消された。夜になったら寝ということが、自然であることを経験できた。日ごろ、論文の検索に躍起になり、情報を追いつめようとする自分に気づいた。ゆったりとした時の流れのなかで、研究の主テーマである立位姿勢保持の意味について、次のようなことを考えてみた。下肢と体幹の位置関係を調節するのに、骨盤の位置がきわめて重要である。頸部前屈姿勢によって、脳が広範囲に賦活されるなど、脳の活動性を調節する仕組みが構え姿勢に備わっている。足底の感覚地図帳みたいなものが、脳内に参照系を介して存在する。姿勢制御の準備状態や、位置情報への注意の配分の仕方を、誘発脳電位で評価できるなど。

翌朝6時に起床した。周囲の霧が少し晴れ、神社(白山奥宮)や低木が見えた。短い時間ではあるが、別世界を垣間見る思いがし、新鮮だった。新しい知見や新たな境地に達した時のなんとも言えない充実感に似ている。頂に向けて8時ごろ出発し、約1時間で到達できた。この目標を達成できた喜びは、なんとも言えないものである。これが、挑戦する意欲と自信につながる。記念写真を撮りながら、院生皆を博士論文完成まで導くと誓った。

下山は快晴となり、途中でけなげに開花した高山植物を目にした。心がなごみ、これまでの辛さが吹き飛んだ。私は、朝、自分の花壇を10分程度眺め、気持ちをリフレッシュしてから出勤する。日常性を味わうことが、リフレッシュにつながる。研究室でも、院生と共に、梅園や菖蒲園を訪れたり、桜の下で花見をしたり、スキングダイビングや釣りに出かけるなどしている。今回の登山も同じような意味を持っている。紅葉狩りや、スキーなど年中行事に事欠かない。金沢は、自然に恵まれたよき地である。

下山の難関を観光新道の急峻な最終場面で迎えた。疲労のため大腿四頭筋が動かなくなった。最終バスの出発時間が5時と迫っており、無理をしても降り続けなければならなかった。掛け声を掛け合いながら、声でリズムを取って、足を前に踏み出し、なんとか踏ん張った。辛うじて、バスに間に合った。1週間ほど、筋肉痛に苦しんだ。限界に達し、なおかつ運動を続けた初めての経験だった。全員、これを機に何かが変わった。